

- 巻頭特集：大学トップに聞く！
- 新連載：慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム

- ニュースリリース
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス(ETS)の登録商標です

 メールマガジンに登録する



新年明けましておめでとうございます。本年もTOEFLメールマガジンをどうぞよろしくお願いたします。

2004年最初のTOEFLメールマガジンは、巻頭に「大学トップに聞く！第8弾」として九州大学総長の梶山 千里氏へのインタビューを掲載。また、新企画として「ことばの習得」をキーポイントに慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの教授・鈴木 佑治先生によるコラムの連載を開始。第1回目の今回はご自身の体験談を含めた「学ぶきっかけ」のお話です。ニュースリリースには、2003年に米国非営利団体ETSより上席役員らが来日して行われたETS SHOWCASE開設記者発表会の様子やETSショーケースのご案内をはじめ、日本人初のTOEFL理事会理事である廣田和子氏の活動の様子やCIEE主催で開催されたUni-Conの様子をお伝えしています。

更に、人気の高い「言葉の玉手箱」も掲載!!
年明け最初のTOEFLメールマガジンをお楽しみください。

巻頭特集：大学トップに聞く！ [Click!](#)

このコーナーでは、大局的な視点からの大学運営・教育改革について大学のトップの方にインタビューしています。第8弾の今回は、九州という立地も考慮に入れアジアを視野に入れたグローバルな改革を行っている九州大学の梶山 千里総長に伺いました。

慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム [Click!](#)

新企画として今回から開始されるこのコラムは、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスで教鞭をとられている鈴木 佑治先生に「ことば」としての英語、「コミュニケーション」としての「ことば」についてご自身の体験談やクラスでの事例を含めコラムとしてご紹介いただきます。

ニュースリリース [Click!](#)

1. ETS SHOWCASE開設のお知らせ
2. 日本人初TOEFL理事会理事 廣田和子氏の活動報告
3. CIEE主催 Uni-Con実施報告
4. 第1回アジア TEFL学会参加報告

言葉の玉手箱 [Click!](#)

Temple University Japan助教授の川手 ミヤジェイェフスカ 恩先生による異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方に焦点をあてた人気コーナーです。

毎回楽しい、役に立つ一言をご紹介します。川手先生による興味深い解説とともに、言葉の世界の意外な一面をお楽しみください。

留学生インタビュー [Click!](#)

現役留学生にいろいろなお話を伺っているこのコーナーでは、留学前・現在・留学後の将来について掲載しています。留学の参考コーナーです。

- 巻頭特集：大学トップに聞く！
- 新連載：慶應義塾大学SFC教授
鈴木佑治氏によるコラム

- ニュースリリース
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

*TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス
(ETS)の登録商標です*

> [HOME](#)

巻頭特集：大学トップに聞く！

第8回：九州大学総長 梶山千里（かじやま・ちさと）氏

本シリーズでは特色ある大学のトップの方に、大局的な視点から大学の運営方針、指導方針、授業の改善などについてインタビューさせていただいた内容をご紹介します。
今回は、九州という立地も考慮に入れアジアを視野に入れたグローバルな改革を行っている九州大学の梶山 千里総長に伺いました。



>> 梶山総長の略歴は[こちら](#)

大学改革について

今後日本の大学において改革が必要になってくると思いますが、特にどのような分野での改革に注目されていますか？

日本の大学は主に「教育」と「研究」の2つを柱に掲げてきましたが、今後は、「国際交流」と「社会連携・産学連携」も重要な領域になると思います。更に九州大学では、将来構想の柱として「新創造科学への展開」と「アジア指向」という2つを新たに掲げています。これは今後、バイオや情報、医学を含めた新しい領域が重要になることと、九州が韓国、中国などアジアに近い立地条件であることが影響しています。

アジアへ視野を広げていくということはグローバル社会を舞台に活動の場を展開していくということですね？



そうですね。そこで4つの柱の一つである「国際交流」が重要になります。九州大学は「21世紀プログラム」という「専門性が高く、かつ非常に幅広く物事が判断でき、しかも国際的な視野を持つ21世紀を担う人材育成」を目標とした教育プログラムを2001年にスタートさせました。選抜方法は、総合評価（アドミッション・オフィス）方式を導入しています。これはセンター試験を課さず、まず教員3名の講義を受け、そのうち一つの講義の感想文を書かせます。高等学校の内申書の書類審査もし、審査に通過した学生たちが集まり試験官と共にディベートをし、面接をします。自分の考えを文章にして、それに基づいてディベートができる生徒、つまり自分で物事を考え自分で解決できる人材を選抜しようという試みです。入学後も、学生の自主性を最大限に

尊重したチュートリアル・システムを導入し、チューター（先生）と一対一で相談しながら学部を越えて目を履修していくうちに自分の専門を決めていきます。定員がまだ1学年26名と多くありませんが、このプログラムの学生には必ず4年の間に1年間程度の外国生活を求めています。その際にTOEFLテストが必要になります。私も30年ほど前、学生時代に受験しましたがそのくらい長い歴史があるテストだということですね。

九州大学の交換留学制度を利用して、このプログラム生に限らず多くの学生が海外の協定校に留学しています。ここで問題になるのが授業料ですが、この制度によって留学先の授業料は無料にできます。財政的支援制度も用意しています。また、海外で学んでいる時間が無駄にならないように、単位互換もしています。これにより、留学を志す人が、その夢をかなえることによって1年の遅れをとり不利になることを回避できます。留学を体験した学生が一般の学生にいろいろな影響をあたえることも期待しています。日本に留学してくる学生達の質をあげるためにも、良い仕組みを作らなければいけません。優秀な学生には奨学金を与えて有意義な経験をしてもらい、本国へ帰国し役職について、優秀な後輩、学生を送ってくる仕組みです。去年の例では、九州大学では、27人の留学生の中で19人の割合ではなんらかの奨学金を授与しています。住環境がよかった、勉強してよかった、学位もとれた、皆が親切だったということを経験して本国に帰ることはとても重要で、本人にとってだけではなく大学にも色々な形で戻ってきます。

日本からアジアへだけの流れではなく双方向の流れを作るといえることですね？

本学の「アジア指向」の柱の具体例を2つご紹介します。一つは国際的産学連携。九州大学は江沢民氏が卒業した上海交通大学という中国でもトップクラスの大学と連携して、互いの行政区内の企業間連携を推進するプロジェクトを進めています。大学間の信頼関係を基礎に、双方の行政や企業が参画するプロジェクトです。もう一つは、九州大学とアジアの大学、双方の学内にお互いのオフィスを置き、産学連帯を含め大学間の研究交流を深め、同時に学生を含めたいい人材を集める手段の一つにしています。現在、中国、韓国の優秀な人材は欧米に流れています。日本に流れてくるようにする仕掛けです。例えば上海交通大学にいる優秀な学生には、奨学金をつけて日本に留学する制度を設けています。今後、北京、ソウル、香港大学などにもこの制度を拡大していきたいと準備しています。

もう一つの柱である「社会連携」については、いかがですか？

「社会連携」は、特に日本の国立大学で足りないことだと思います。一つの知的財産ノウハウを出す「産学連携」は多くの大学が行っていますが、社会に対してどんな奉仕情報を出したかという意味での「社会連携」はほとんどありません。ようやくロー・スクール（法科大学院）やビジネス・スクールができましたが、これはまだはじめての一歩だと思います。本学は平成15年10月1日、日本に類を見ない感性・デザイン分野を持った九州芸術工科大学と統合しましたが、これを機に（今後政府との相談が必要ですが）この感性、デザインを活かした「デザインスクール」という専門職大学院の設立を考えています。また、現在、医者や、薬剤師など日本の多くの免許は、一度取得すれば一生有効です。運転免許でさえ数年で更新するのに、なぜ生命や安全に関わり日進月歩する技術の免許や、日々変わる社会の規範である法律に携わる仕事をする人たちの免許は更新されないのでしょうか。TOEFLテストはその点うまくできていて、語学の能力は常に使われないと駄目になるということで2年間を有効期限と定めています。これからは、ライセンスを持っている人は3年ごとに1週間講義受講を義務とするような法律を作り、その講義部分を大学が受け持つシステムがあってもいいのではないのでしょうか。このような社会人教育も、今後の大学のあり方の一つだと思っています。

これからの大学運営で「社会連携」は重要なポイントになると思います。大学側が社会人向けの短期プログラムを設置すれば興味を持つ方も多いのではないのでしょうか。九州は中小企業が多いので、その中でアジアビジネスに精通したトップ経営者を育てるようなプログラムを大学が提供できればいいと考えています。個々の社会人がノウハウを蓄積しスキルを開発したいと思っても、単独では効率が悪いですが、大学によるプログラムがあれば集約できます。九州大学としてはアジアに近い環境から「アジアビジネスに長けた、社会情勢を勉強できる機会」を提供したいと思っています。また、産学連携による社会貢献も重要だと考えます。本学の場合は、企業と「包括的な産学連携」を行っています。一人の先生と企業との連携は「線」でしかありません。しかし、先生

達のグループと企業という線の集合体にすれば「面」になります。「面」が広がることで企業との連携の中で一つの問題が解決され、その過程ででてくる別の問題に対して、違う角度からの解決策が生まれます。これは、ある意味で包括型産学連携を大学側から表示する新しいビジネスモデルになると思います。本学では現在、三菱重工や大日本インキなどと包括型連携を行っており、これからその数はどんどん増加するでしょう。

現在の大学の評価について

日本国内における大学の位置付けについてはどうお考えですか？



一般的に、日本社会は大学を平均値で見る傾向にあります。しかし、私は平均値が高い大学が必ずしも良い大学とは限らないと思っています。むしろ、いくつの「ピーク(強い学科)」があるかによって判断されるべきではないでしょうか。例えば、日本では東大が一番よいと言われていますが、全ての分野がトップではないですよね。米国のハーバード大学も同じで、法律、経済、物理などは質の高い学部ですが全学部がそのような高いレベルではありません。米国の場合は大学の学部別に具体的な点数が出されるので、学生はそれぞれの学部・学科を目指します。今後は日本でも、このようにピークがいくつあるかが勝負になると思います。入学試験の偏差値ではなく、研究や社会貢献、国際交流に関してどれほどの

ピークがあるかが重要になります。世界ランキングも学生が大学を選ぶ一つの判断材料になりますが、ここでもピークがどれくらいあるかがポイントになります。例えば、ある大学に10程度ある研究部門の中で4分野が世界のトップテンにはいっているとします。残りの6分野はトップテン圏外で、その6分野は世界で100番位かもしれない。しかし、世界のトップテンに4分野が入っているから「いい大学」の評価を受け、よい学生が集まる。長いスパンで考えると平均値が100位くらいでも強い学科(ピーク)がある大学はいつの間にか良い大学として評価を得るようになります。また、平均レベルの勝負ではなくピークの勝負にすると最終的に平均レベルがあがるということが起きるのです。つまり、ハーバードの評価が高いのは、ピークの数が多いのです。逆に日本では、まず平均点が高いことが重要になります。これは大学をどう改革していくかの上でとても重要なポイントになります。あえて言えば、集中して3分野くらいを徹底的に支援しピークを高めたらどうかと思います。

国立大学の法人化

国立大学が法人化されて出てくる影響や変化はどのようなものだと思いますか？

法人化により、それ以前と比べると大学の自由度が増しますので、これをどのように活かすかがポイントになります。急激な改革は無理でしょうから、長い目で見た変革が必要ですね。最初の5年は緩やかに、次の5年はスピードをあげてやるのが私の構想です。現在は本当の変革に対する助走期間です。改革の中身の実現は、どのようなインセンティブを与えるかにかかってくると思います。学内の先生たちへは、研究者の数を増やしたり、大型の研究費をとってきた場合は研究室の面積を2倍に広げたりするようなことです。つまり、インセンティブは「お金、人、スペース、時間」の4つがポイントになります。私が考える構想は、活動する場所が「教育」「研究」「国際貢献」「社会貢献」の4つ、将来構想の方向性として「新創造科学の展開」と「アジア指向」の2つ、そのためのインセンティブが今述べた4つで「4・2・4アクションプラン」と謳っていますが、これを本校の今後の活動のエンジン(駆動力)の一つにしています。国立大学を法人化すると、それぞれの大学が取り残されないように頑張りますし、自らの判断で資金も人も投入できるようになります。国立大学の法人化は、プラス面、マイナス面の両方がありますが、良い面として大学が自主的に学内競争を生み出すことがあげられます。つまり、お金、人、時間と研究する場所を大学独自で決められるということです。特に理系の場合、論文数や、研究費、共同研究の数など数字で表しやすいので、実績をあげたところに研究する場所や研究員を増やすインセンティブを与えることができるように

なります。それと同時に社会全体が、特徴をもったピークが存在をどれだけ認めていくかが大切になります。このような大学選びが進めば変化が促進されますが、日本の場合はまだ考え方に固定観念があり、多少時間がかかると思います。しかし、これからはピークを見せるとそういう考え方がだんだん変わってくると思います。

在学生・卒業生へのメッセージ

では最後に、在学生・卒業生に期待すること、心がけて欲しいことのメッセージをお願いします。

「21世紀プログラム」の真髄と同様、自分の身の回りで起きること、自然・政治・経済などの変化に対して「変化の理由」を考えて欲しいのです。間違っても構わないので、自分なりの答え・意見を出すということが自分の個性になり、個性の蓄積が独創性に繋がります。これが最終的に、独創性の蓄積により創造性の育成に繋がります。ですから、身の回りで起きることに自分なりの考えをもつ習慣を身につけることが重要です。この習慣を身につけるために、乳幼児教育が大切になります。2歳児にとって身の回りで起こることは全て初体験で、子供は親に「なぜ、なに」と質問し、それに対して親は答えて子供を誉める。そうすると子供は質問する喜びを持ち、さらに身の回りのことに関心を持つようになります。これが最終的に独創性、創造性に繋がっていくのです。日本人に創造性がないというのは間違いで、訓練されていないだけなのです。これからは自分の特徴を持つこと、良い意味での自己主張も必要ではないでしょうか。それから、目的意識を持つことも大切です。自分がやりたい、なりたいと思うことを明確にして願い努力すれば、積極的になることができ、だいたい実現しますよ。

ありがとうございました。

(インタビュー：TOEFL事業部長 高田幸詩朗)

[Back to top](#)

梶山千里(かじやま・ちさと)氏 略歴

昭和15年	福岡県生まれ
昭和39年	九州大学工学部卒業
昭和41年	九州大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和44年	マサチューセッツ大学大学院高分子工学科博士課程修了、Ph.D取得
昭和50年	工学博士(九州大学)
平成12年4月1日から	工学研究院長
平成12年から	高分子学会会長など学会等の役員を多数歴任
平成13年11月	九州大学 総長就任

九州大学HPリンク：<http://www.kyushu-u.ac.jp/>

[Back to top](#)

- 巻頭特集：大学トップに聞く！
- 新連載：慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム

- ニュースリリース
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス (ETS) の登録商標です

> [HOME](#)

慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム

第1回目：日本人が英語ができないわけ 筆者の留学体験より



鈴木 佑治(Yuji Suzuki)

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部教授 兼 政策・メディア研究科委員

1944年3月2日生まれ。

1966年 慶應義塾大学文学部英文学科卒業

1978年 ジョージタウン大学大学院博士課程修了

学位： Ph.D (言語学博士) (ジョージタウン大学、1978年)

専門分野： 言語学 (意味論、語用論)、英語学

所属学会等： Modern Language Association Linguistic Society of America
International Pragmatics Association

鈴木研究室の取り組みは、[こちら](#)からご覧いただけます。

コミュニケーション重視の英語は個人的体験から

これから私がお話する英語教育に関する考え方は、私自身の実体験に基づいているものです。最初に、自己紹介をいたします。私は、現在、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで教授をしています。いろいろな授業を担当していますが、英語もそのうちの一つです。専門は言語学といいまして、言語についていろいろ探究しています。言語学と言ってもさまざまな考え方がありますが、言語を科学することです。何をもちて科学とするか、これまた考え方は千差万別で、それによって言語の見方考え方は違うのです。私は言語学に転向する前は文学を研究していました。英文学ですが、詩とか寓意物語が大好きでした。イギリス文学だけではなくアメリカ文学も大好きです。特に好きな作家はナサニエル・ホーソンという作家です。『緋文字』という大作を残しました。人間社会の不条理とか、自然に挑もうとする人間の弱さや愚かさを描いています。ヘミングウェイの『老人と海』とつながるものがあります。年老いた漁師が、苦難の末に大きな魚を捕まえ、小船にくくりつけて港に戻って来て見ると、鮫に食べられて骨だけが残っているという話です。

そんなことから、詩的イマジネーションは私には大切ですから、主観的なものを排除して客観性だけを求める科学観は肌に合いません。この頃では主観的に見えるものにも目を向ける科学観が出てきました。医学でも、代替医療という発想があり、現代の医療に過去から伝わる民間医療の考え方を入れて、気持ちとかお祈りとかも加味して治癒する医療が研究され始めました。言語学者の中にもローマン＝ヤコブソンという巨匠がいました。この人は、詩人であり、舞台作家であり、文学者であり、文学批評家であり、何よりも、偉大な言語学者でした。「言語はコミュニケーションの一部として研究しなさい」という言葉を残していきました。私はこの人が好きです。ですから、大学では、「言語・コミュニケーション」という授業も担当しています。英語もコミュニケーションできなければ意味がないのです。そのコミュニケーションとは何か、そこで使われる言語とは何か、日本人が英語を話すということはどういうことなのかを考えることが必要なのです。



まったく通用しなかった日本の英語教育

でも、これだけでは、なぜヤコブソンさんを尊敬するようになったのかピンとこないと思います。次のような経験があったからなのです。私は、静岡県のある港町で生まれました。小さい時から、港に行っては外国の船を見ていました。外国に行きたくて仕方ありません。1960年頃、高等学校の友達とよく外国の船の乗組員と英語で話をしに行ったのですが、あまり上手く話せたとはいえません。そうこうしているうちに大学に入りました。1962年の春でした。目標であった英文学を専攻し、原書で英文学の作品を読みたいという夢がようやくかなったのです。神田で古本を買っては読みあさりしました。その後、大学院に進みましたが、それまでには相当数の本を読みました。もちろん訳読です。シェイクスピアの作品などは、原書で10作品は読んだと思います。文法の構造は熟知していましたが、語彙数もかなりあったと思います。それが、24歳になって突如アメリカに留学してやろうと思い立ったのです。1968年の4月のことで、24歳になったばかりでした。私が、ホーソンが好きであったことはすでに述べましたが、それが構じてアメリカでの登録名は、ホーソンのナサニエルをとり、ナサニエルNathanael・ユージYuji・スズキSuzukiとしてしまいました。アメリカの大学院そして社会保障ナンバーもこの名で登録してあります。ただし、ホーソンのナサニエルは、Nathanielと「ニエル」の部分はnielです。アメリカではそれが普通です。ですが、語源的にはナタニエルですからNathanael、すなわちnaelの方が正しいのです。アメリカ人でさえここまでは知りません。私は原語のスペルを採用したのです。アメリカ人にそのことを質問されるたびに驚かれました。これはほんの一例ですが、アメリカに行く前の私は、英語についてこんな知識も豊富でした。



羽田を出て、そんな私がホノルル経由でサンフランシスコに入り、そこからテキサスのダラス経由でなぜかケンタッキーの山奥に行きました。その間、ホノルルで税関を通り、空港で何度か乗り継いだのですが、英語がさっぱりわからず、サンフランシスコからダラスに飛ぶ飛行機の中で見えたグランドキャニオンは、ぼっかりと空いた自分の心の空白のように思えたものです。

中学校から12年間あんなに勉強した私の英語の実力など、現実の英語をまえに、窓の下に見える広大なグランドキャニオンに比べたわが身ほど小さく思えたものです。英語を話しているアメリカ人のスチュワーデスや客が偉いと思ったわけではありませんが、過去12年間の英語の猛勉強が愚かに見えました。飛行機を降りてバスに乗り

旅をし始めると、その感は更に差し迫ってまいりました。バスの停留所に降りてカフェテリアに入った時のことです。人が大勢並んでいます。一人一人カウンターに向こうの女性にオーダーをするのですが、私は何一つ満足にオーダーができません。この瞬間に、私は、それまでのすべてを忘れて、この国に残り、英語関係の分野で博士号を取るまで帰らない決心をしました。

ある州立大学の英文科の先生が言ったショッキングなことば

今、メジャーリーグに日本のプロ野球の選手がたくさん流れて行きます。野球の本場はアメリカです。本当に野球が好きな若者が本場で試してみたくなるのは当然でしょう。よく分かります。私もそうでした。野球とベースボールは違います。同じように、日本の英語教育と本場の英語での教育は全く違います。私は、あるアメリカの大学院に願書を出したのですが落とされたのでした。アメリカでは落とされた理由を聞くことができますので、ために聞いてみたのです。するとその英文学科長はあるものを見せて私にこう言いました。1968年ですから、まだ、日本人に対してかなり偏見があったことは確かですが、そうとだけは思えない事実を冷たく突きつけられました。それは、私の為に書いてくださった英文学の有名教授の推薦状でした。その学科長は、「これはあなたの日本の英文学の教授が書いた推薦状ですか？」と聞くのです。「そうです」と答えると、真っ赤になおされた英文を見せながら、「こんな文を書く人が教える英文科を信用できますか？」と言われたのです。

本当のことです。1968年の5月、南部のある州立大学の英文科の学科長が私に言った言葉です。このことも私に先ほどの決意を新たにさせました。当時、日本人が留学生用のビザをとることは大変でした。まず、アメリカの大学の入学許可書が必要でした。今でこそ若者がどんどんアメリカに行きますが、当時はアメリカに旅行するだけでも一戸建てが買えたほどです。世界中がリッチな国、アメリカに行きたい、暮らしたいと思っていた時ですから、アメリカでは逆に、貧乏国からは来てもらいたくなかったのです。

ですから、私としてはどんな所でもよいからまず入学許可書をもらいたかったのです。それを知ってかこの学科長は、私が日本を出る前の1968年の3月頃、アメリカに来るなどと言う手紙を私に送りつけていたのです。余計なお世話です。そう思った私が英語研修プログラムでビザをもらってきてしまったので、すぐ帰したくて私を呼びつけたのです。

真っ赤に直された私の書いた手紙、そして日本人の英文科の先生達の推薦状を見ながら、その学科長に言いました。「いや、だから私はここに来たのだ」と。すると、「英語研修が終わっても君は行く所がない、私の英文科ではNoだ」というのです。私は、その質問には答えませんでした。なぜなら、既に英語研修プログラムでも優秀な成績でしたし、カリフォルニアの大学からアドミッションをもらえることになっていましたから、どちらかというマイナーなその大学にいる必要もなかったからです。



私がショックを受けたのはそんなことではなく、日本の英文学者達の英文がアメリカの大学の学科長に嘲笑されたことです。この体験はまだ昨日のこの様に思い出しますが、振り返ってみると懐かしくも思うのです。いやなことは忘れなくなるものですが、何故か行って見たくなかったのです。そこで、それから約30年近く経た1996年に、アメリカ南部を旅行した時にまた通ってみました。

私の妻や子どもたちは、そんなドラマがあったことなど知りませんから、さびれた田舎町の大学が余ほどみすばらしく見えたのか、「お父さん、こんな寂しいところにも居たの？」と聞くのです。返す返事も有りません。あの学科長は確か言語学者だと言っておりましたが、以後、どの言語学の学会でも会ったことはないし論文を読んだこともありません。あの頃、既に60歳くらいの感じがしましたのでとくに引退されたのでしょうか。偏見の中で突きつけられた冷たいことばの刃でしたが、あの赤い添削は唯一の真実です。

ただ、私のようなアジア人を英語力だけで判断して能力なしと初めから決めつけたことは、偏見以外のなにものでもなくあやまりであったことを自らの為に実証できてよかったと思っています。英語力またはことばの能力そのものが知的能力でないことも身をもって体験しました。

日本人は会話どころか読み書きも駄目

話をまとめてみましょう。私がアメリカに行って初めて体験したことは、要するに、日本人は英語の聞き話は下手だが、読み書きは上手だなんていうのは嘘だということです。みんな駄目でした。当時の先生方もそうだったんです。実際に英語を聞き、話し、読んで書いてないのですから、ただ、訳読で解説をしていただけなんですから上手くなるわけがありません。テニスでも野球でもチェスでも12年間やれば、普通、どんな人でも一通りの真似事はできます。相当の腕前になるでしょう。ところが、外国語に関しては違います。日本では、訳読型で構文分析ばかりしているので、ついぞ英語で何かをやることができないのです。



私は、貧乏学生でしたので、それから、日本語を教えながらお金を稼いで貯めたお金でまず修士号を取り、その後、博士課程に進み英語の意味論で博士号を取って日本に帰って来ました。そこまでの十年の間、既に述べたように、ありとあらゆる人種の友達ができました。自分で言うのも気が引けますが、人に迷惑をかけるのが大嫌いで、特に親を心配させることが嫌で嫌でたまりません。ですから、1970年代の荒れたアメリカでも、これは悪いなと思ったらそんなことには近づきませんでした。友達も面白い人たちばかりで、みな良い人たちでした。中にはケンカして別れた人もいますが、その人達もみんな良い人たちでした。これらの人たちとの交流が私の英語コミュニケーション能力を養い、研究する英語学の糧になっているのです。

私はアメリカのコメディが大好きでした。芝居の喜劇ではなく、日本で言えばお笑いです。ただし、日本のお笑いとは質において違うかもしれません。1970年代の皮肉と諧謔に満ちた批判的コメディやジョークは、私にとっては英語のリズムとか話し方のモデルでした。ディック・グレゴリーとかリチャード・ブライヤーらアフリカ系アメリカ人のコメディアン、白人ではジョージ・カーリンというコメディアンが私のお気に入りでした。まねをしようとしたこともありましたが、私も笑いますが、私も人を笑わせません。人を飽きさせないことにはかなり長けてきました。ですから、10年もいたら色んなことが分かってきて、そんな時に昔日本で読んだアメリカ文学の名作が数倍よく分かるようになりました。サリンジャーの『ザ・キャッチャー・イン・ザ・ライ』などは、隠語が分かるようになって初めてその面白さが分かったのです。

ことばの構造をどんなに分析して熟知してもそれは英語の文法フリークを作るだけです。アメリカの外国人の為の英語の授業は効果的ですが、せいぜい半年もとれば十分です。英語の読み書きができかつ討論に加わるようになるには、普通の授業に出て現地の人と競争した方が数倍効果が出ます。そういう授業は自分の関心に合わせて選びますから動機づけができていますからです。また、そうした授業の担当者はコンテンツをよく熟知していますから勉強になります。外国人の為の英語の授業でcontent-basedというのがありますが、あまり勧められません。これは、学習者を動機付ける為に経済なら経済を少し触るだけで、教える人自身は経済のド素人でもよいのです。時には、学習者のほうがコンテンツをよく知っているなんてことがよくあります。学習者が教える人をなめるようになります。研究者ではなく、単に英語を話せるだけの英会話の先生なのですから、研究の仕方也不知道し研究分野の英語を教える能力はありません。

渡米して2年目に、日本語を教えるようになった大学で、英文学者のクラフチック先生に会いました。先生は、ギリシャやメソポタミヤの神話の授業を担当しており、私はそのうちの3つの授業を取りました。人柄はやさしくユーモアに富み、その反面、授業ではとても厳しい女性でした。先生は書いたペーパーを真っ赤になるまで直してくれました。私も、何度もオフィスアワーに行き、アイデアや英文がおかしいと思ったらしつこく聞きに行ったものです。授業の後など先生を引きとめ、書いたものをもっていつかは納得できるまで教えていただいたものです。一度も誉めてもらったことはありませんでしたが、クラスではトップのペーパーを何度も書きました。アメリカ人の学生と競争したのですから本当に自信がつかしました。そんなある時、先生が一つのペーパーを私に見せてくれました。日本の著名なアメリカ文学者が書いたペーパーです。この方も亡くなりました。「この人のペーパーより君のペーパーの方が内容も英文も数段上だ」と言いました。私にはどうでもよいことです。私の競争相手はその時点で、アメリカ人でしたから。この先生とは今でもお付き合いをしています。私に書くことを教えてくれた恩師です。先生は既に引退されましたが、今でも何年かに一度会ってはお話をします。私にとりましては、先生は、永遠に私の英語の先生なのです。



このような体験を踏まえて、やる気にさせる英語コミュニケーション活動のモデルを作り、慶應義塾大学SFCで英語プログラムに活用しております。今回は、「使える英語」慶應義塾大学SFCの実践現場について述べます。

[Back to top](#)

- 巻頭特集：大学トップに聞く！
- ニュースリリース
- 新連載：慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス (ETS) の登録商標です

> [HOME](#)

ニュースリリース

	ETSショーケース紹介
	米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会
	2003年 Uni-Con実施報告
	The First Asia TEFL International Conference, 2003(施:韓国)参加報告

■ ETSショーケース紹介

2003年11月20日（木）、[米国非営利教育機関ETS \(Educational Testing Service\)](#) は、日本におけるETSプロダクツの最新情報発信地として、英語教育に携わる教育者・研究者を対象に当協議会レセプションエリアにETS ショーケースを開設しました。またショーケースにはETS作成の新教材を体験できるデモ体験コーナーも設置しています。皆様も是非お越しください。ここでは、ショーケースの内容を開設日の様子と共に紹介します。（TOEFL事業部）

ETSショーケース開設 **教育者対象**

当協議会レセプションエリアにTOEFL®、TOEIC®テストなどで知られるETSが、英語教育者・研究者向けにショーケースを開設しました。主な目的は、1. TOEFLテストの最新情報の提供、2. ETS作成の新教材紹介 です。

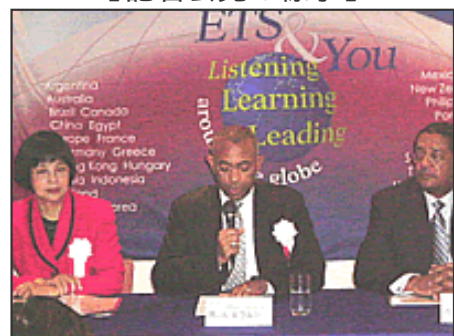
オープニングセレモニー、テープカットでは、米国ETSよりポール・A・ラムジー（上席統括役員/写真中央）、カーソン・ハーバート（統括担当役員/写真右）、アンバー・チェン（エグゼクティブ・ディレクター/写真左）が出席し、各メディアとのインタビューや懇親会も催されました。

同日、上記マーケティング役員3名による記者発表会も行われ、日本とのパートナーシップ強化を強調する内容となりました。

【テープカットの様子】



【記者会見の様子】



展示資料コーナー 教育者対象

ETSが年に1度発行している[TOEFL® Test and Score Data Summary](#)や調査報告書、ETSプロダクツの最新案内書、CIEE TOEFL事業部で作成している各資料などが展示されています。また、ETS作成のMissionビデオ（約10分）もご覧いただけます。

デモ体験コーナー 教育者対象

ショーケースには3台のパソコンが常設されており、それぞれ、1 [Criterion](#)、2 [LanguEdge™](#)、3 TOEFL® Samplerを体験することができます。デモ体験中にご質問やご不明な点があった場合には、CIEEスタッフがその場で対応します。

11月20日（木）、ETSショーケースオープニングセレモニー出席者の多くが、やはりデモ体験コーナーに集中しました。特にライティング自動評価プログラムCriterionへの関心が高く、その場で多数の質問があげられました。

【熱心に新教材の紹介を聞いている様子】 （写真手前は新ブローシャー）



- 1 大学・高校の授業などで使用可能なオンラインによるライティング自動評価プログラム
- 2 次世代TOEFL®に取入れられる「聞く・読む・書く・話す」の4技能を総合的に測定できるLAN対応の教育支援ツール
- 3 コンピュータ版TOEFL®テストの例題を67題含むCD-ROM（Windows/Macintosh対応）

COME&TOUCHセッション 教育者対象

CIEEではご予約頂いた英語教育関係者・人材開発担当者の皆様を対象に、専門スタッフによるETS開発のLanguEdge™・Criterionの説明およびデモ体験「COME&TOUCHデモ体験セッション」を開催中です。新教材や次世代TOEFLテストに関する最新情報、その他TOEFLテストに関してご理解を深めていただけるこの機会を是非ご利用下さい。

また、Criterionはオンラインツールですので、ご自宅や学校など場所を問わず使用できます。Criterionデモ体験申込みおよび両教材の詳細は、[こちら](#)をご参照ください。

ETS ショーケース：9:30～17:30（土日祝除く）

【COME&TOUCHデモ体験セッション予約・お問い合わせ】

（注）英語教育担当者・人材開発担当者対象

〒150-8355 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B1

国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部 TOEFL事業部

Tel：03-5467-5670（担当：山口） Fax：03-5467-7031

CIEE TOEFL事業部では、受験生の皆様にもTOEFLテスト受験生必読の受験要綱の配布（ダウンロード可能）やコンピュータ版TOEFLテストの例題が67問含まれているTOEFL® Sampler（CD-ROM）の無料提供、身分証明書の規定に関するチラシ等を配布しています。また、ETS作成のペーパー版TOEFLテスト対応公式教材も販売しております。

（注）TOEFLテスト申込み・スコアに関するお問合せは受付けておりませんのでご注意ください。

[Back to top](#)

次のニュース：[米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会へ](#)

■ 巻頭特集：大学トップに聞く！
 ■ 新連載：慶應義塾大学SFC教授
 鈴木佑治氏によるコラム

■ ニュースリリース
 ■ 言葉の玉手箱
 ■ 留学生インタビュー

*TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス
 (ETS)の登録商標です*

> [HOME](#)

ニュースリリース

	ETSショーケース紹介
	米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会
	2003年 Uni-Con実施報告
	The First Asia TEFL International Conference, 2003(施:韓国)参加報告

■ 米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会

～英語教育を通じた、積極的な自己表現の大切さを説明！～



米国TOEFL理事会 理事 廣田和子氏（ネバダ・カリフォルニア大学国際教育機構Japan（NIC）代表、財団法人国際教育協会常務理事）が11月1日、愛知県春日井市にある中部大学メモリアルホールにて、春日丘高等学校の1年生と2年生180名、保護者、教員約150名を対象に「英語学習のススメ」をテーマに2時間に及ぶ講演を行った。全国で展開している英語教育の向上を目的とした啓蒙活動の一環として行ったもの。

この日はちょうど中部大学の学園祭初日ということもあり、活気溢れるキャンパスでの開催となった。講演は自身の留学体験から始まり、国際社会に通じる人間の育成と英語教育の必要性についての内容が語られた。

また、日本と欧米の文化の特徴を挙げ、日本人が英語を覚えられない理由を述べ、以前カウンセリングをした若者の話などを通して、幼い頃から話す訓練をしなければならぬと保護者に訴えかける場面もあった。

講演の最後に自らが携わるNICの学生が作成したビデオを上映したときには、会場内の誰もが食い入るように見つめ、質疑応答の時間には「昔自分の夢は教育者になることだったのを思い出しました。もう一度その夢を叶えるために頑張ってみます。」と感激する生徒や、「私たちは英語を学習する機会が少なく、また続けようとしても途中で挫折してしまいます。どうすればいいのでしょうか？」といった英語修得に熱心な保護者からの質問も相次いで飛び出し活気溢れる内容となった。教員からも「今まで生徒から質問が出るようなことはなかった。それだけ講演内容が心に響いたのだと思う。」と驚きの声が挙がった。

（写真は、講演中の廣田氏）



© コミュニケーションハウス(株)

[Back to top](#)

次のニュース：[2003年 Uni-Con実施報告へ](#)

ニュースリリース

	ETSショーケース紹介
	米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会
	2003年 Uni-Con実施報告
	The First Asia TEFL International Conference, 2003(施:韓国)参加報告

■ 2003年 Uni-Con実施報告



2003年12月10日(水)に東京ウィメンズ・プラザ(東京都渋谷区)において、2003年度「次世代TOEFL及び海外派遣プログラムに関する情報交換会」を開催しました。本会(通称:Uni-Con)はCIEE主催で大学の国際交流部門担当者の方々を対象に、情報提供と参加者相互の情報交換の場として毎年12月に実施しています。今年度はCIEEが「TOEFLテストの日本事務局」と「世界規模の非営利国際交流団体」の2つの顔を持つことに鑑み、「TOEFL®テスト」と「国際交流」の両テーマで実施し約30名が参加されました。

最初に、TOEFLテストに関する情報として近年留学生の受入や国内大学院入試においても利用されるようになった「TOEFLスコアの利用方法」、2005年9月導入予定の「次世代TOEFL最新情報」および「ETS最新教材」に関して説明を行いました。また国際交流に関しては、2003年度延べ595名が参加した国際ボランティア・プロジェクト参加状況報告、新プログラム(エコボランティア in オーストラリア)紹介、CIEEが大学に協力できる「TOEFL学内説明会・国際交流プログラム説明会」「語学研修のアウト・ソーシング」の実施状況説明を行いました。

とりわけスピーキングが新たに導入され学生の留学への影響が予想される次世代TOEFL最新情報及び語学研修のアウト・ソーシングについては、熱心にメモを取る参加者の姿が目立ち各大学の関心の高さが窺えました。情報交換会の後はCIEEオフィスレセプションにて懇親会を開催し、各参加者とも情報交換やネットワーク作りの場を楽しまれました。



本情報交換会は来年も今年度と同様の時期での実施を予定しております。今回以上に有用でタイムリーな情報を提供できるよう企画を練っておりますので、是非多くの関係者の方々にご参加いただけることを願っております。(国際交流促進部)

[Back to top](#)

次のニュース：[The First Asia TEFL International Conference, 2003\(施:韓国\)参加報告](#)へ

ニュースリリース

	ETSショーケース紹介
	米国TOEFL理事会理事 廣田和子氏、春日丘高等学校で講演会
	2003年 Uni-Con実施報告
	The First Asia TEFL International Conference, 2003(施:韓国)参加報告

■ The First Asia TEFL International Conference, 2003 (施:韓国) 参加報告

アジア諸国で英語教育に携わる教員を対象とした第1回Asia TEFL International Conferenceが2003年11月7日から3日間、韓国の釜山で実施された(ただし、最終日は観光が組まれており、主な行事は2日間)。

会長のHyo Woong Leeが歓迎のスピーチの中で、「相互交流をとおしてアジアにおける英語教育の発展及び平和と繁栄に寄与することを目的とするものである」と当学会を紹介した。今回のテーマは「Emerging Issues」。参加者は、33の国と地域から、総勢700名を超えた。主催国である韓国が約260名で、日本100名、中国88名、ロシア52名、ベトナムの49名と続く。基調講演はBernard Spolsky (Bar-Ilan University, Israel)の「Setting Goals for Second Language Learning, Teaching, and Testing」。発表者は小池生夫氏「Asian English Education System: Same or Different? Analysis through Dimensions」、田辺洋一氏「English Teaching in Japan」、岡 秀夫氏「A Non-native Approach to ELT: University or Asian?」、吉田研作氏等「Realization of the Ministry of Education's New Courses of Study in Japanese Junior and Senior High School EFL Classrooms」など64名と日本からが一番多く(グループ発表及び日本で教えるnative speakersも含む)、中国38名、韓国31名、香港22名など20か国以上から193名であった。また、Richard Day「A Critical Look at Authenticity」やKeith Johnson「From Communicative Activity to Task: A Short But Significant Journey」など英語圏からTESOL専門家も分科会を担当し、多い時には13の分科会が同時に進行した。

参加者は主に大学教員が中心であったが、日本からは高校教員も数名参加し発表も担当した。テーマは教育政策や英語教員の実態調査をはじめ、教授法、Bilingual教育、評価など多種多様で、また同じテーマでも国による違いや共通ありで、まさに巨大なスーパーマーケットに迷い込んだ感があった。出席できた分科会は全体の10%にも満たない数であったが、感想を何点かまとめてみた。

- アジアにおける英語教育の状況も英語を公用語にしている国もあり多様であるが、共通する状況は、
 - 1) 国がカリキュラム策定やテキストの編集、選定を主導している。
 - 2) 大学受験の影響が大きい。
 - 3) 生徒・学生の発信力が弱い(理由は儒教の影響とする発表者が多かった)。
- 共通の課題は、国際語としての英語力の定義、教えるための目標、評価基準(基調講演による)。

3. アジアという1つのグループで固まると、ともすればアジア的価値観と欧米的価値観を二項対立的に捉える罠に陥りやすいので、それを避けながら国際語としての英語を世界規模で考えることが重要。
4. 英語習得を、産業界における国際競争に勝つための1つの手段としての国策として掲げる国が多いが、英語による草の根交流の大切さも是非生徒や学生に伝えてもらいたい。



既に国境を越えての共同プロジェクトも個人レベルで始まっており、3回、5回と回を重ねることで組織的な成果が大いに期待できると思う。欧州では、「The Common European Framework of Reference for Modern Languages」が策定され、「Self-assessment grid」もできている。アジアにおいても同様の作業に着手することが今後の1つの目標になりそうである。

釜山経済界の寄附のおかげで同学会の入会費も今回の学会参加費も無料であった。2004年はソウルで開催の予定。財源の安定した確保が今後の課題である。同学会のホームページは、<http://www.asiatefl.org>。

【写真：今後の方向性について話すRegional Representatives。中央は前JACET会長小池生夫氏。本学会の副会長を務められている。】

最後に、学会とは直接関係ないが、「韓国のTOEFL®スコアはここ数年なぜ急激に伸びたのか？」の筆者なりの感想を紹介する。限られた情報源に基づくのであくまでも感触にすぎないことをお断りする。

1. 入試や採用試験に有利
2. 語学学校が開設しているTOEFL®コースを多くの若者が受講
3. めざす目標は到達するまでがんばる
4. 親も教育費を惜しまない
5. 恐らく世界で一番Test-orientedな社会である
6. 1人平均10回くらい受けているらしい(6回分を一度に申し込む受験者もいる)
7. 日本以上にインターネットが普及しており、英語教育がネット上で盛ん。
韓国の年間受験者は9万人前後だが、これは延べ人数であり、実数は数万なのかもしれない。

(文責：CIEE エグゼクティブアドバイザー 仲野 友子)

[Back to top](#)

[ニュースリリーストップへ戻る](#)

- 巻頭特集：大学トップに聞く！
- 新連載：慶應義塾大学SFC教授 鈴木佑治氏によるコラム

- ニュースリリース
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス (ETS) の登録商標です

> [HOME](#)

言葉の玉手箱

連載：第10回

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。

毎回ご好評をいただいているこのコーナーでは、ETS公認コンサルタントの川手 ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説してください。言葉の世界の面白さをお楽しみください。



Dr.川手 ミヤジェイエフスカ 恩(めぐみ)

テンプル大学ジャパン 大学附属英語研修課程 助教授
(Megumi Kawate-Mierzejewska, Ed.D, Temple University)

2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門分野： 中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics)

"Happy New Year" それとも "A Happy New Year"??



2004年を迎え、今回は新年にまつわる挨拶の表現に焦点をあててみたい。日本語で年が明ける前は「よいお年を」と言い、年があげたら「明けましておめでとうございます」と言うように英語でも"Happy New Year"と"A Happy New Year"を使い分けるのだろうか、などという疑問をもったことはないだろうか。日本では、印刷済みのカードや年賀状などに代表されるように、日本人が英語を使う時は"A Happy New Year"という表現ばかりに遭遇するがこれはなぜだろうか。

考えてみれば英語母語話者が、年が明ける前に"A Happy New Year"と言っているのをあまり聞いたことがないような気がする。年が明けてからでも、"Happy New Year"はよく耳にするが、彼らが"A Happy New Year"と言うのはあまり聞かないかな・・・などといろいろな思いをめぐらせていた。"A Happy New Year"というのは文法的には正しいけれど、もしかした誤用なのかなと考えたりした。更に、これは日本語の「今年も・・・」とか「今年こそは・・・」という、新しい年を限定している表現からきたもので日本人独特の英語表現なのだろうか、などと考えたりもした。

そんな最中、先日、大学ですれ違った英語の母語話者に"Have a very Happy New Year"と言われ一瞬、耳を疑った。そして頭のなかでその言葉をもう一回繰り返し"Have A very Happy New Year... mmm?"と思い、更に、果たして本当にそう言ったのであろうか、もしかしたら他のことを言ったのだろうか。"A"に気をとられていたのでそれに続く部分には注意を払ってなかったが、そういえば"very happy"じゃなくて"great"って言ったのかな・・・などといろいろな考えをめぐらせた。その間、沈黙が続いたが、結局"Same to you"などと言ったのを覚えている。





というようなわけで、どうやら英語ではどちらの表現も使われるようだ。ただし、一般的な挨拶としては"Happy New Year"が、年が明ける前後の定式表現のようにになっているようだ。また、"A Happy New Year"というのは、「来年」（年が明ける前にこの表現を使うとき）もしくは「今年」（年が明けてから使うとき、つまり今であれば2004年）というのを限定したい時に使うようだ。さて、そうすると日本語の定式表現である「よいお年を」や「あけましておめでとうございます」は"Happy New Year"なのだろうか。

[Back to top](#)

©2003, CIEE All Rights Reserved.

留学生インタビュー

College of Mount St. Joseph 足木雅俊（あしき・まさとし）さん

今回インタビューを受けてくださったのは...

アメリカ・オハイオ州にあるCollege of Mount St. Josephで老人学を学んでいる足木雅俊さんです。

TOEFL®テスト

受験年月	スコア
1994.4	470
1999.10	520
1999.11	560
1999.12	560
2000.1	580

入学に必要なTOEFLスコア：500
 （入学当初）

【参考情報】

2000年4月 渡米
 2000年7月 入学
 2004年6月 卒業予定
 大学： College of Mount St. Joseph (<http://www.msj.edu/>)
 学部： Department of Behavioral Sciences
 学科： Gerontological studies
 - Long-term administration concentration
 （現： Aging service and administration）

---学校について教えてください。

College of Mount St. Josephはカソリック系の私立大学ですが宗教くさは全くなく、卒業までに2つの宗教（キリスト教に限らず）のクラスを取らなければいけない他は、普通の大学と同じです。シンシナティのダウンタウンから15分くらいのところにあり、学生数は3,000人以下のとてもアットホームな雰囲気です。先生も学生の名前をすぐに覚えてくれます。1クラスの学生数も少なく、受講者が3人というクラスも2度程ありました。僕はそこでGerontology（老人学）を勉強しています。

---Gerontology(老人学)とは珍しい学科ですね。どうして老人学を勉強しようと思ったのですか？

理由はいくつかありますが、一番の理由は自分の叔父が関係しています。彼は若い頃に交通事故に遭い、それ以後ずっと寝たきりの生活でした。そんな叔父を元看護婦の叔母がずっと看病してきた姿を見て、「自分に何かできることはないか」と思うようになりました。日本でも介護保険制度が導入されて以来、この分野の発展には目を見張るものがあります。このような理由から、福祉の進んでいるアメリカで教育を受けることで日本の介護福祉に何らかの貢献ができると考えたのがきっかけです。

---大学生活について教えてください。

日本の大学も卒業しましたが、日本とアメリカの大学生活は全然違います。日本の場合、大概勉強の優先順位は低いと思いますが、アメリカの大学生には勉強が最優先です。特に留学生は勉強により時間がかかるので、目的意識を持っていないと大変です。授業も日本の場合は先生の講義を聴き、最後に試験を受けるだけですが、アメリカの場合、レポート、グループワークやプレゼンテーションが多くあります。英語がよくしゃべれなかったこともあり最初は戸惑いましたが、すべての授業がそんな感じなのですっかり慣れました。むしろ慣れないとやっていけません。

僕の専攻は老人ホーム経営で、これに関連してアメリカの老人ホームでインターンシップをしました。大変でしたがアメリカの生活に直接触れるという意味でとてもいい経験でした。勉強以外では、僕の住んでいるシンシナティはそれほど大都市ではないので、日本ほど遊びに行くところがないように思います。週末は映画を見たりゴルフやバスケットボールなどのスポーツをするか、友達の家でパーティーをしたりナイトクラブに行ったりするくらいです。これといって遊ぶところはありませんが、日本とアメリカの大学生活でどちらが充実しているかと聞かれたら、絶対にアメリカの生活だと答えます。なぜなら、きちんとした目標があって、それを勉強しているからです。

---TOEFL®テストはいつ受験しましたか？ また、どのような勉強をしたのですか？

初めて受験したのは、日本の大学入学直後に必須で受験した時です。当時は特に興味もなく、スコアが470だったことと、やけに難しいテストだなと思ったことだけ覚えています。その4年後に留学を決め、今の大学が外国人の入学にTOEFLスコアを要求していたので真剣に受けるようになりました。僕の場合は、留学まであまり時間がなかったため、短期間でスコアを上げる方法をいろいろ考えました。それで思いついたのが、苦手なリスニングの代わりに文法とリーディングの勉強に時間を使うことです。リスニングの力を上げるには時間がかかると思ったので、文法とリーディングでミスがほぼ出ないように徹底的に勉強しました。もう一つは、何度もテストを受けることだと思います。最初は勉強量に比例してスコアは上がりましたが、ある時スコアが伸びなくなりました。何度も受けることで突然その壁を越えたような気がします。

---大学卒業後の進路はどう考えていますか？

最終的には、アメリカの福祉制度や老人ホームの経営手法を日本に持ち込むことができればいいと思っています。この国の老人介護制度は日本よりも歴史が古く、制度もより優れており見習うべき点がとても多くあります。僕の夢はアメリカの老人介護制度に精通することで、日本とアメリカの橋架け役になり日本の介護制度にいい影響を与えることです。ですから、最終的には日本に戻るつもりですが卒業後2～3年はこちらの老人ホームで働いて経験を積みたいですね。英語で"Working Knowledge"という言葉がありますが、「知識は実際に使いこなすことが出来て初めて役に立つ」という考え方です。インターンシップの経験からも、社会で実践しないと学校で得た知識も単なる知識のための知識になってしまうと実感しました。同時に、始めてアメリカという国にじかに触れることができました。学校のみであれば極端な話、アメリカ人とコミュニケーションしなくても過ごせますが、働くとなればそうはいきません。自分の言いたいことを正確に伝え、相手が言いたいことも正確に把握しなければ問題になりかねません。そのような密なコミュニケーションを通してはじめて理解しあうことができ、アメリカ人の考え方を知ることができました。2年の予定で渡米してきましたが、そのようなこともありできればもう少し長くアメリカにいたいと思っています。

---これからアメリカの大学への留学を目指す方へアドバイスをお願いします。

留学に関してだと色々ありすぎるので、僕からは現在社会人の方や日本の大学卒業後に留学を考えている方にアドバイスを送りたいと思います。僕自身、日本の大学卒業後に留学か就職かで随分悩みました。友達が就職する中で、自分だけ留学すると決断するのは後ろめたい気持ちがあったのを覚えています。しかし、しっかりとした目的があるのなら思い切って留学しても後悔することは無いと思います。実際そういう人たちは思っていた以上大勢留学していますし、彼らの話を聞いて勇気付けられることもあります。留学したいという気持ちが明確であれば、迷わずに留学しましょう。

こぼれ話



友達と遊びに行った帰り、突然告白されました。とても綺麗な女の子で前からかわいいなあとは思っていたのですが、まさか自分に興味があるとは思っていませんでした。友達の運転する車の後部座席で好きな音楽の話をしていましたが、彼女が突然"I love you too!"と。予想外の告白と友達のいる中で発言してしまう大胆さに、"ああ、やっぱりアメリカ人はオープンなんだ"と変に感心。こんな時、英語でどう返事していいのかわからなかったのので、とりあえず、"Let me think... (ちょっと考えさせて)"と言ったら、彼女はとても怪訝そうな顔。それではっと気がついたのは、彼女が言ったのは"I love U2 (有名なロックバンド)" だということ。よくよく考えてみれば音楽の話をしていただけだから当然なのだけど。勘違いのカルチャーギャップに苦しみ、英語の奥深さに気がついた一日でした。



(2003年11月10日 インタビュー)

[Back to top](#)